

JACS

Japan Architectural Consortium of Students

全日本学生建築コンソーシアム

2010 residential design competition
住宅設計コンペ



residential design
competition

七トヨタ 「住まいの原点を再考する」 ～今、真に問われているものは何かを問う～

住まいの原点は再考どころか再々考、繰り返し問われているテーマです。

特にこの半世紀、家族の様態も大きく変わり、

また都市を含む環境も地球規模で変わっています。

技術も然りです。

さまざまな快適さを追求すると、家はどんどん重装備になっていきます。

一方で、住宅を取り巻く経済状況は厳しさを増しています。

原始時代に戻るわけではなく、

2010年この国における生活を深く考察したうえで、

本当に大切なものはなにか。

無駄・虚飾を廃し、あなたが今あるべきと考える住まい像を創造してください。

建物の配置から仕様まで、総合的に提案してください。

テーマの解釈は自由です。設計主旨でご説明下さい。

テーマをふまえ、建築・販売を前提とした住宅であること。敷地に対する景観を最大限に考慮したデザインで間取りは、家族条件を考慮し、近隣住民とのコミュニケーション等、公共的な視点にも配慮すること。将来的にデザイン住宅増大に寄与することをめざしたもので、下記項目を満たすこと。

建物条件 ■構造 木造在来工法

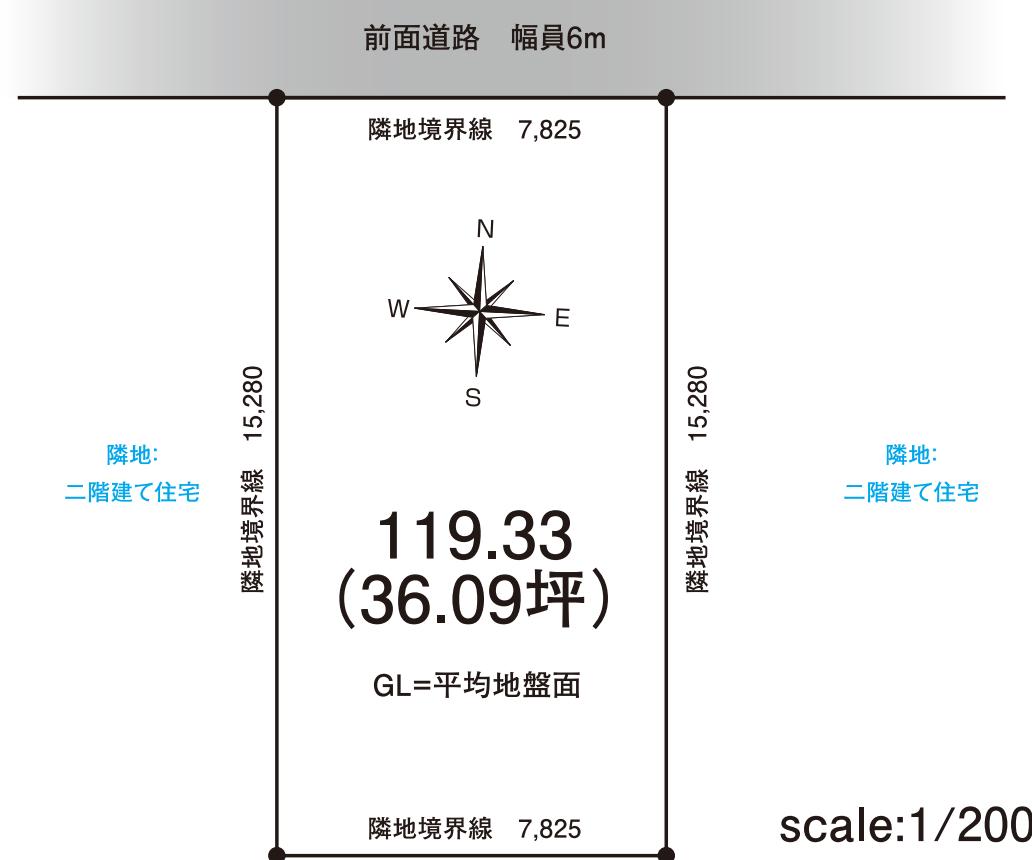
建築基準法上、建築可能なこと。(建築に関わる各種法令などを遵守)

外構 駐車スペース2台分

敷地概要

甲信越地方のある地域を想定 (特に考慮すべき気象条件は定めません)

- 用途地域／第一種中高層住居専用地域
- 容積率／150% ■建蔽率／60% ■敷地面積／119.33
- 地盤の高低差／なし
- 地区計画／隣地側1m、道路側1.5mセットバック(仕上り面)



※上記項目より細部にわたる条件については、常識の範囲内で各自想定のこと

家族条件

お父さん	38歳
お母さん	36歳
長男	7歳
長女	5歳
小型犬	一匹

提出内容

1次審査

- 設計主旨(1200文字程度にまとめる)※1枚目に記入
- パース(カラープリントまたはカラープリンター出力)データ入稿は不可。
- 設計図面(縮尺は1/100)
 - 各階平面図(西を上部に配置)
 - 立面図(4面以上)●配置図(屋根伏せ図を兼ねる)

※質疑については4月末までメールにて受付し、主催者および審査員が特に必要と認める質疑に対しては準じメールやHP上にて回答致します。

これら全てA3横位置(297×420mm)4枚以内に納め、綴じずに、下記2カ所に提出。

- 1.書類は「JACS新潟事務局」まで提出。
 - 2.データ化(pdf書類、もしくはjpeg:200dpi以上)し、フォルダにまとめ、圧縮し下記に送信。
- 1.書類送付先 JACS新潟事務局 〒950-0148 新潟市江南区東早通1-1-40(ステーツ内) 「2010設計コンペ係」宛 Tel.025-383-3003 Fax.025-383-3733
2.データ送信先 honmo-n@kk-ishikawa.com

表現方法は、鉛筆、インキング、着色、写真貼付、プリントアウトなどいずれも自由。但しパネル化しないこと。※送付に当たって書類を丸めず平面で提出すること

2次審査 ○ 模型

- 縮尺:1/50、サイズ:W60cm×D60cm×H45cm以内(ベースを含む)、重量:5kg以内(ベースを含む)
JACS東京事務局まで提出。※ケースに入れて展示する為、規定サイズを厳守して下さい。
JACS東京事務局 〒136-0072 東京都江東区大島1-30-3「2010設計コンペ係」宛

※搬入費用は応募者負担のこと。また提出模型の返却はいたしません。

応募にあたっての注意事項

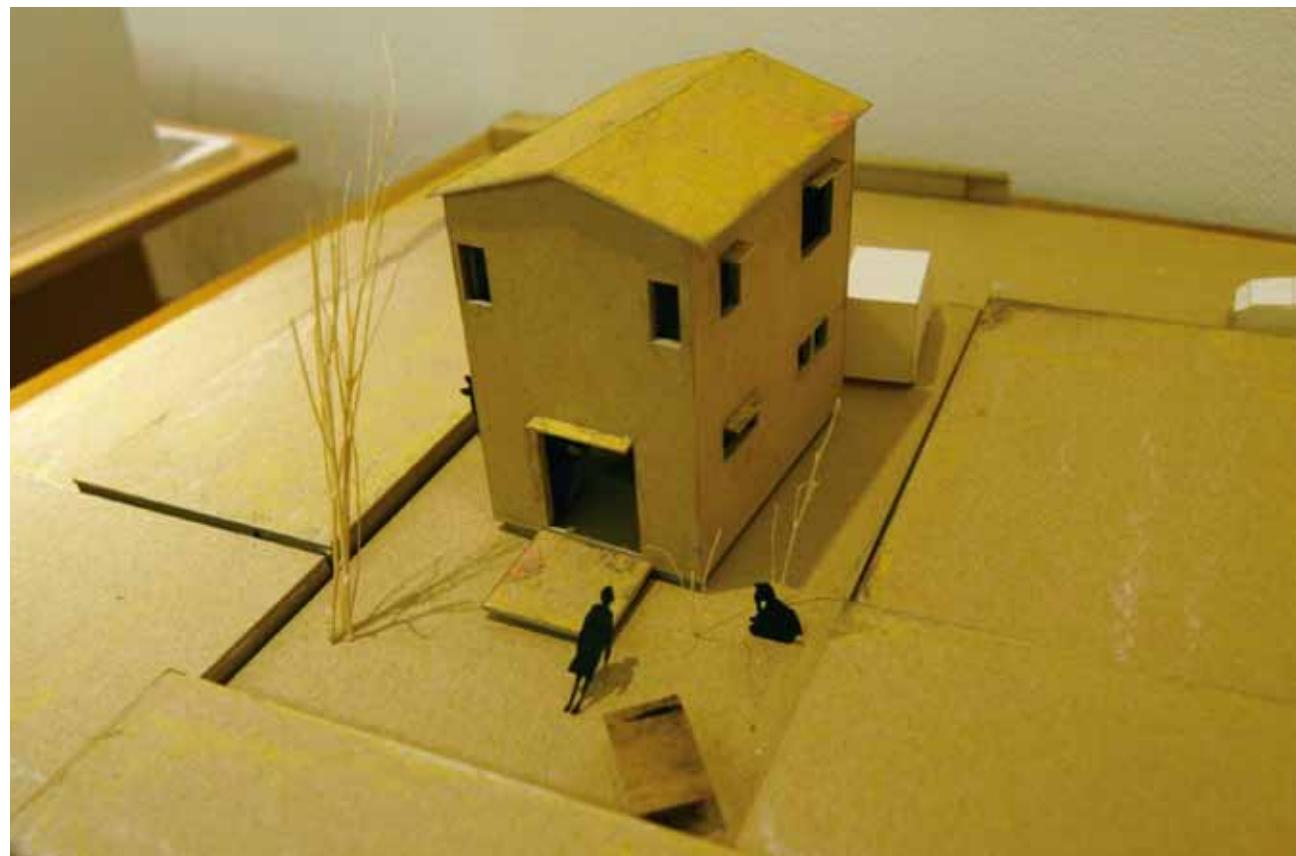
- 応募は1人に付き1点(グループでの応募も可能)
- 応募作品は未発表の作品であり、他のコンペに提出していないものに限ります。
- 設計主旨・図面は、規定のサイズに印刷出力して応募してください。
- デジタルデータの応募は認めませんが、応募作品は、Web上にて全て公開いたしますのでデジタルデータを予めご用意下さい。(jpeg・bmp形式のみ)
- 提出する設計主旨、設計図面、模型には裏面に氏名を記入して下さい。

Grand Prize

最優秀賞「豊かな家」

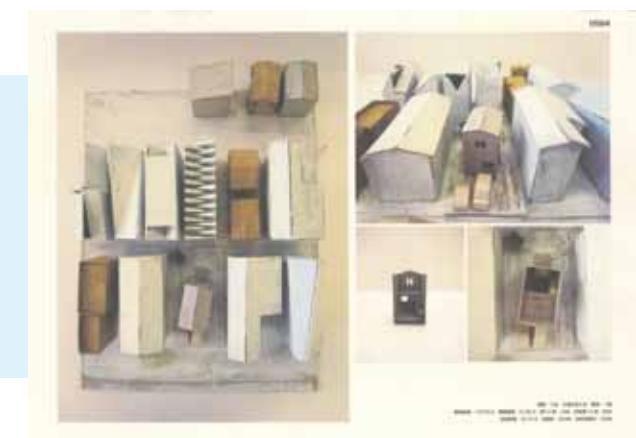
京都市立芸術大学大学院
美術研究科 環境デザイン専攻

谷口 尚史



Concept

住まいの原点とはなにか。快適さの追求による重装備とは。今、真に問われているものとはいっていい。住まいの原点というものは、そもそも存在するのだろうか。自分が生まれ育った住環境を思い出そう。住まいの原点には普遍解はない。人それぞれの生まれ育った環境そのものが各々の原点であり、原風景なのではないだろうか。この家にはこれといった特徴はない。とにかく足らない造形、住まうに最低限のモジュール、車2台分の駐車スペース、庭、犬小屋。しいて言うと家の軸線が少し振れていることと、家の規模が少し小さいところが特徴として挙げることが出来る。暮らしの豊かさについて考えてみたい。与えられた敷地いっぱいに家を建てるのではなく、小さく計画すること。安価で素朴なこと。普通であること。工夫して住まうこと。「あえて小さい」という選択肢。家の傾きは窮屈な日本の街並みのなかでは、自由に見えてくる。軽々と、ポツンと。傾けられる余裕があるとも言える。この家は夫婦にとっては終の住まいであり、子供たちにとっては仮の住まいである。子供たちの独り立ちは、言い換えると夫婦にとって第二の生活のはじまりである。はじめから大きく計画するのではなく、時の流れを流動的にとらえてみると、住まいの原点。僕にとってのそれは、些細ではあるけれども住まい方において、いくらかの選択肢の中から自分で選びながら暮らしてゆくことができるということである。暮らしの豊かさについて考えることを通して、住まいの原点なるものの追求を行いたいと思った。



協賛者賞「大黒空間」

信州大学大学院
工学系研究科 社会開発工学専攻

加藤 光／藤岡 佑介



Concept

大黒柱は、住まいを支える。大黒柱は、家族の心を支える。

大黒柱は、住まいの中心となる。大黒柱を中心として、家族の生活がいとなまる。

大黒柱を、空間へと添加する。大黒空間。大黒柱のある家によって、現代日本における住まいの原点を創造する。

日本家屋など、古くからの木造住宅には「大黒柱」があり、住まいを支え、家族の心を支えていた。大黒柱は、その住宅において真っ先につくられる部分であり、そこに住まう家族にとって、生活の中心として認知され、さらに、それは家族そのものの象徴でもある。そして、そこには、形式から家族みんなが共有できる求心性が存在していると考えられる。

しかし、何もかも曖昧で、ぼんやりしたものが好まれる昨今の社会では、家族という共同体のなかにおいても、個々人のプライバシーを求めて、住まいは個別化しつつある。その中では、家族の意識は常に拡散し、重要視されるべきはプライベートな部分（マイルーム）である個人となっている。それにより、家族みんなが共有した感覚を得られる機会は皆無となってしまい、住まいの個別化を一層助長している。

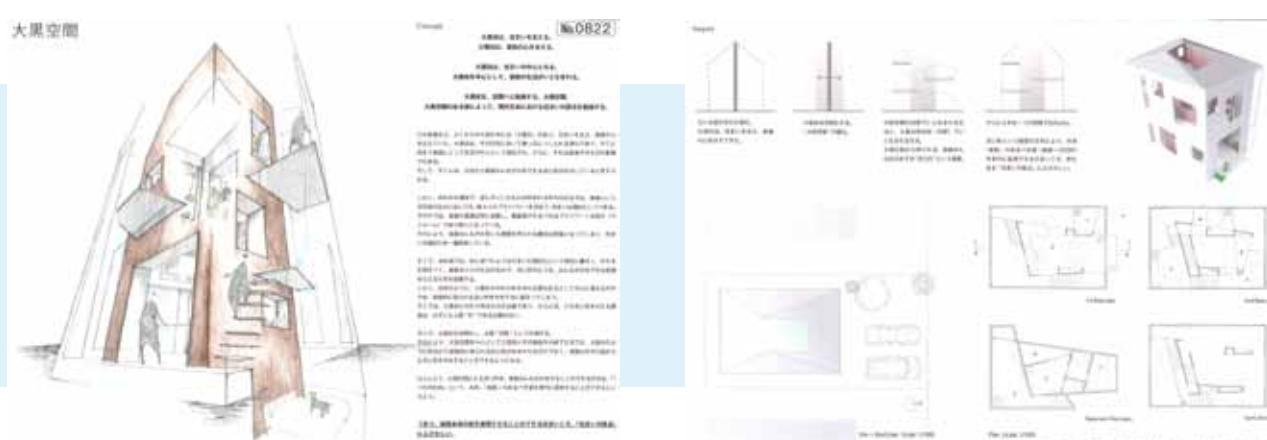
そこで、本計画では、先に述べたような住まいの個別化という現状に着目し、それを打開すべく、家族が日々の生活のなかで、求心性のような、みんなが共有できる感覚を与える住宅を提案する。しかし、従来のように、大黒柱そのものを住宅の主要な形式として中心に据えるだけでは、視覚的に得られる求心性を共有するに留まってしまう。そこでは、大黒柱に代わり得るものが必要であり、さらには、この求心性を与える要素は、必ずしも「大黒柱」である必要はない。

そこで、大黒柱を空間化し、「大黒空間」として計画する。

それにより、大黒空間を中心として日常的にその周囲や内部で生活でき、大黒柱のように形式から視覚的に得られる求心性が共有されるだけでなく、視覚以外の行為からも求心性を共有することができるようになる。

以上により、大黒空間による求心性を、家族のみんなが共有するこができる住宅は、「1つの共同体」という、本来、「家族のあるべき姿を現代に実現する事ができるといえよう。

つまり、家族本来の姿を実現させる事の出来る住まいこそ、「住まいの原点」にふさわしい。



優秀賞 (10点・順不同)

*作品のコンセプトは一部抜粋したものです。



「丘のある家」

慶應義塾大学大学院
理工学研究科 開放環境科学専攻

山口 貴司

大きな丘のような屋根は、家族をおおらかに包み込み、周辺環境との関係を紡いでいきます。屋根の上には生活が大きく溢れ出し、それらの行為によって屋根の様相は様々に変化します、昼寝をするときはベッドになり、お茶をするときはテラスになり、おしゃべりをするときは椅子になり、読書をするときはテーブルのように振る舞つたりします。これらのように、生活と屋根の距離が近づき、互いが密接に関わり合うことで、屋根を中心とした新たな住まいのかたちが生まれます。

また屋根の下には、立体的なつながりをもった大きなワンルームの空間が広がっています。寝室と水回り以外の各機能を立体的なワンルームの中に配置していくことで、家族の雰囲気を至る所で感じられ、生活の行為を大きくゆるやかにつないでいきます。



「7層のリビングを持つ家」

横浜国立大学大学院
工学府 社会空間システム学専攻

岩倉 巧

駐車場と一緒にしてつくる半屋内空間は、家全体を一周することができます螺旋状の立体的リビングとして考えます。

このリビングは7つの層に分かれています、層状と階段で移動したり、中央の大きさを開いた空間を囲むように巻き付いた階段では1階で行われる様々な活動を見る事ができる客席のような場所となる。

この一本の層状のリビングを住宅のハレの場と位置づけてみると、ここでは来客や家族間での流動的なコミュニケーションを楽しむ場となり、また逆に塔状の階段に接続する個室は安定した個人個人のための固定的な場となる。例えば、ハレの場で7つの層を活かしながらギャラリーを開いたとすると、家全体を使う事で立体的な展示を可能とし、これまでの家の概念とは違う別のものとして価値を見いだすことが期待できる。

現代において住まいの原点を考えると、人と接触する流動的な場と静かに体を休める固定的な場所の二つを個人が上手く利用して生活している。そのことから、この家はそうした二つの二面性をうまく使い分けながら生活することができる。



「都市の肌理」

金沢工業大学大学院
工学研究科 建築学専攻

藤本 泰亘

現代の都市は、急激に加速する資本主義の中、工業化が進み合理性、経済性でしか都市、建築を評価できないようになっている。住居においても合理的、経済的な観点で快適性を追求した結果、その場その場の空間としての個性を消失させてしまい、住居が重装備シェルター化している。合理的な快適性を得ることで精神的な豊かさが失われてしまったのだ。

ここでいう精神的な豊かさというのは、春夏秋冬に対する住居スタイルと、外部、都市との距離感のことである。現代の重装備シェルターは春夏秋冬があるにもかかわらず、一年を通して同じ住居スタイルで、またどこにいても都市との距離を感じる。

「暑いから窓を開ける、寒いからドアを1枚閉め、一枚服を着る」という生活から「暑いからエアコンをつける、寒いから床暖房をつけ、ストーブをつける」そういった文化になってしまい、快適な住環境は外部、都市との関係を遮断し、身体を通しての精神的な豊かさを失っているのだ。一枚の壁により重たい境界で外部との関係をつくるのではなく、様々な種類と強度を持つ世界(繊細な世界)で住居が、都市から住居までの関係を再構成するべきではないだろうか。



「小さな床の家」

京都工芸繊維大学大学院
建築設計学専攻

石橋 慶久／長柄 芳紀

これは小さな床がたくさんある住宅です。その床の上には1つずつ特徴的な家具が置かれています。この住宅に隔てる壁は無く、また床をすらしてできた隙間によって小さな空間は次々と繋がっています。

この住宅は元来、日本の襖や障子が水平方向に持つたいた「隔てなさ」を、多方向に作り出しています。小さな特徴的な床がふわふわ浮いている、現代の人と人との距離感を表現したような住宅です。



「空洞の家」

信州大学大学院
工学系研究科 社会開発工学専攻

塩入 勇生

原点は、簡素なものだ。物事はいつだって単純だったのである。土を掘って住処にするも、木をくりぬいて住処にするも、石を積み上げて住処にするも、住まうための純な空間は‘簡素’なものであると思う。しかし、これらの空間は‘簡素’が故の消極的産物ではない。むしろ生活に即し、かつ可能性に溢れているものなのである。

‘簡素’な空間の基本は、ひとつながりの空間で構成されていることが挙げられるが、現代でプライバシーすら無視し空間をひとつながりにすることは、まず成り立たない。しかし、空間をひとつながりにすることは、生活や雰囲気を家族と共有することとなるのではないか。私は、住まい手が家族の存在を感じる中で、同じ雰囲気の元に生活することを重要視しているのである。よって現代に適合する‘簡素’な住宅を設計することにした。

優秀賞 (10点・順不同)

*作品のコンセプトは一部抜粋したものです。



「光が導くジュウ空間」

早稲田大学大学院
創造理工学研究科 建築学専攻

杉田 想／小森 陽子

日本の住宅は木による柱構造が、環境と人をより近くに引き寄せたのではないかと考えます。「住宅」は外敵や外部環境から身を守るものため、外と中を区切るものでした。隣人と区切り、さらに現在では、個人を区切るものとして機能しています。隣人や周辺環境、そして家族同士を繋ぐものとして住宅を提案します。

そのために、私達は「ジュウ空間」というものを提案します。

「ジュウ空間」とは「重なる」「柔軟」「住宅」という意味を持ちます。

「重なる」とは、部屋同士、家同士が重なる空間で、お互いが共有する空間です。それは通常の住居で用意された共有の空間(リビング等)とは異なる空間を指します。またその重なる空間は新しく発生した空間で、「柔軟」に活動が変化する空間であります。そのような空間が「住宅」に存在することで、「住宅」は人と人を繋ぐものとして機能していきます。



「伸び縮みする家」

東京芸術大学大学院
美術研究科建築専攻

竹内 吉彦／朴 真珠

人は自分の背中をどこに向けるかによって領域を確保できる。他社にとっては意思表示として認識され、両者の関係性に大きく影響を与える。

自分の体の向きを変えることだけで自分の領域は伸び縮みする住宅をつくることで、家族それぞれにとって「一人になる」、「家族とつながる」という相半する二つの状況が、背中合わせに共存し得るのではないかと、考えた。



「カベぎわの生活」

近畿大学大学院
システム工学研究科 システム工学専攻

中平 祐子／豊後 亜梨紗

家にとってカベとはどんな役割をしてきたのか。カベはもちろん部屋と部屋を分けるものだったが、それだけではなく、家という場所では家族の繋がりを分離してきた可能性もあると思う。

カベを造るのにはここが何かの部屋であちらが何かの部屋だということを示している。部屋をはっきりと示すということは、家族間の境界がはっきりしている場所があるということである。

そこで、分離するカベをなくし、ワンルームから家の発展を目指した。この計画ではワンルームなため、部屋と部屋のはっきりした境界がない。機能という機能を両側のカベにすべて収めることで、真ん中にぽっかり空いた機能のない空間が家族の過ごし方の多様性を持つ。

ある日はその空間全部がリビングになるかもしれないし、またある日はみんなで並んでお昼寝をするかもしれない。すなわち、住まいの原点とはこの家はそれぞれひとりの時間は一切考えず、家族が家族と過ごすための家として提案する。



「SANDWICH HOUSE」

宇都宮大学大学院
工学研究科 地球環境デザイン学専攻

堀之内 裕輔／鈴木 悠司

一つの家族の生活空間におけるつながりに加えて、個々の家族の生活空間を重ね繋ぎ合わせることで、より大きな家族としてのスタイルを提案する。

一方で、切り妻屋根のカタチは、「いえ」のアイコンとして広く認知されている。この形状もまた「原点」であり、多くの人はこの屋根の下に1つの家族が暮らしていると考えるだろう。そこで、「いえ」のアイコンを中心線で切り崩し、「ルビンの壺」のように相向かわせることで1つの家族の認識を解体する。解体するものの、内部は路地空間を介して繋がりを持続する。さらにこれらが団地形成された場合、それらが連続して立ち並び、隣の家族と自然と1つの認識の中に埋もれ、繋がりを持ち始める。あたかも縁側を介して井戸端会議をするかのように。

つまりここでは、隣り合わせの住宅同士が相互に関係を持ち始める。そのため他の家族との生活が共有される。家族同士、住宅同士は繋がってはいないが、その路地空間が媒体となって、見えない領域を生みだし、繋がり始めるだろう。家族内で完結はせず、原点へと引き戻すことを期待し、家族を媒体として追求するのではなく、同じような目的やそれを補完するような機能や営みを持った多くの家族との運動を可能にする住宅を提案し、内部空間、外部空間とともに等価に扱う事によって、あたかも敷地全体が「いえ」であり、近隣と繋がることのできる「まち」となることを期待する。



「直線の交わる家」

京都造形芸術大学大学院
芸術研究科 芸術表現専攻

原田 隆広／北原 奈津子

私たちの想い描いた住まいの原点は「家族と生活する姿」である。

個人のプライベートが完全に囲われた空間の中で過剰に守られ、家族と交流する場は住宅の中に割り与えられたわずかなスペースに限られている。今や住宅は「個人」の個室で構成されつつあり、部屋を区切ることで家族との距離はますます遠く離れていく。そこで、個人と家族の相手にあった壁をスキマへと置き換えることで、家族の中でスキマという曖昧な空間を共有する事で、個人の領域を保ちながら、家族との関係に繋がりを持たせる事を試みた住宅を提案する。

住宅の真ん中に幅1200mmの上に伸びるガラスで囲われたスキマを配置し、その両側には半階づつレベルの違う部屋がスキマに対して開いて重なっている。各部屋へのアクセスはスキマに張り巡らされた階段で移動できるように計画し、パブリックな部屋からプライベートな部屋へと動線が枝分かれするように構成されている。

各部屋からレベルの違う他の部屋へ立体的に動線と視線をスキマで交わらせる事で、家族と顔をあわす機会を増やし、ひとつながりの空間の中で「個人の領域」と「家族の領域」を両立させ、プライバシーを保つつも家族の気配を感じる空間を可能にした。

入賞(18点・順不同)

※作品のコンセプトは一部抜粋したものとなります。



「内部と外部の家と庭」

東京都市大学
工学部 建築学科
城内 栄剛

決して広くはない場所をふたつの場所に区切る。「生きられる家」と「空白の庭」ができる。ひとつの場所はもうひとつの場所があることによって快適な空間になる。「生きられる家」は、外のテラスを望む縁側のように。「空白の庭」があるからそういう感覚になる。「空白の庭」は、手前の場所も含めて部屋全体が温室になっているかのように。これも「生きられる家」があるからのことだ。1足す1が2、でなく3になったような、すごく得した感じがある。そうした建築の方法によつた、部屋全体に明るさと広がりを気楽さが生まれる。

の場所も含めて部屋全体が温室になっているかのように。これも「生きられる家」があるからのことだ。1足す1が2、でなく3になったような、すごく得した感じがある。そうした建築の方法によつた、部屋全体に明るさと広がりを気楽さが生まれる。



「曖昧に免れる」

芝浦工業大学大学院
工学研究科 建設工学専攻
齋藤 高慶

個の領域が曖昧な住宅。住宅というひとつの箱の中に家族それぞれが曖昧に領域を創り出し暮らしていく。また、お互いの領域を感じながら暮らしていく。今まで届かなかった声が届く。家族というつながりを再認識する。

時の流れにあわせて、この家の中は曖昧なまま変化していく。子供達は成長に合わせて自分の領域を創り出していく。人も、家も、陽の光や風の流れさえもこの中ではすべて曖昧に免れていく。



「バシリカ(仮)」

広島大学大学院
工学研究科 社会環境システム専攻
日野 晃太郎

向かい合っていても、背を向けていても同じ場所を共有しながら過ごす風景。この住宅での日常を思い浮かべると、そこには二人以上の関係が見つけられる。同じ机で勉強する子供と新聞を読む親、近所の人たちを招いて料理教室を開くことも想像できる。人の行動の自由度を高めた住宅を求めていくと、教会や喫茶店、または大学の研究室のような空間に行き着いた。これらのプログラムはいずれも現代でいうフリーアドレスの形式である。この結果はこれらの住宅の方向性を見つける手がかりになるかもしれない。



「奥搭庭と家族」

大阪工業大学大学院
建築学専攻
齋藤 慶和

昔の住宅は今ほど設備が充実していた訳でもなく、敷地も広いため充実した部屋をとることができました。しかし現状の住宅に囲まれた住宅地ではどうしても多くの部屋を確保しようとすると、敷地いっぱいに建築を建てようとしています。私は、多くの部屋があるからといって充実した暮らしができるとは限らないと思います。充実した暮らしを得るには部屋ではなく、家族の様々な居場所をつくることだと考えます。居場所とは人がそこにいれば居場所になります。若い夫婦と子供2人とペットにとっても居場所を作り、生活が豊となるような住宅を考えます。



「House in the rising earth」

芝浦工業大学大学院
建設工学専攻
矢野 龍太

住宅の内部まで大地が立体的に連続している住宅を考える。敷地を、通りに面した場所と奥まった場所に2分割するように、地面に繋がる土をサンドイッチした壁を建ち上げ、螺旋状に部屋を取り付ける。各部屋の天井の中には土が入れられ、壁の中の土と連続している。壁や部屋中に植栽が生い茂り、季節や時間の経過に合わせてインテリアが刻々と変化していく。空調でコントロールされた人工的な環境の中に、生態系の連続性が生まれている。人工的な環境と地球的な生態系が共存する暮らし、その地球と人間の新たな関係を住処として提案する。



「衣替えする家」

神戸大学大学院
工学研究科 建築学専攻
一瀬 健人

「1.現代の与えられすぎている空間」私たちは与えられすぎている。nLDK型の住宅に代表されているように、居間・ダイニング・寝室…といった「室」が与えられている。一見、合理的な様に見えるが、私たちは「室」のせいで窮屈かつ固定的な生活を強いられている。家を取り巻く環境は「室」には受容するとのできない出来事であふれている。「2.出来事を受け容れる空間へ」日常的に些細なことから家族形態の変化まで様々である。このような出来事によって日々変化し、使用者が自ら空間を獲得していく空間。「3.壁に対する二つの操作」住宅を構成する要素である「壁」に二つの操作を加える。



「とんがり屋根の家」

広島工業大学大学院
工学系研究科 環境学専攻
藏本 恭之

外部または外部要素を住宅内部に取り込み、個としてのスペースを確保しながら、洞窟やゲルやアリの巣のようにひとつつながりの空間をつくりていきます。本来別々である室を繋ぎ合わせ、上下左右に空間を埋めるように延ばしていく。部屋ではなくスペースとして生まれてくることにより、フレキシブルな場所となり、家族形態の変化にも対応していきます。また別々になっていた空間が間仕切り壁なくゆるやかに繋がることにより、空間だけではなく希薄になつてきていた家族の関係や意識をも繋いでいくのではないかと思います。



「かべとびら・とびらかべ」

日本大学
生産工学部
野村 亮介

家族内の人と人の距離感というのは年を重ねるごとに変化していく。また、快適空間も年を重ねるごとに変化していく。しかしその快適空間の使用時間スパンは秒単位から年単位まである。以上の点をふまえて住まいの中で大事なのは、柔軟性に富む空間と、自在に空間を操れる壁と、自らの空間を作らせる行為にあると思いました。本計画は「かべ」と「とびら」に着目し住まいにおける部屋の意義と部屋の創出、部屋の使用周期とリンクさせ、今あるべき住まい像を提案いたします。



「少しつなげる家」

慶應義塾大学大学院
理工学研究科
芹澤 敬介

私たち人は、決して一人で生きてはいけないと思う。誰とも関係を持たず、暮らしていくほどの人は強くないと思う。そこに自分の存在を肯定してくれる人がいるからこそ頑張れるのだ。家族という関係のためには個人の間の距離感が重要である。

直接的ではなく、建築を通して精神的な遠近のつながりをつくることで家族という関係を濃密にしていきたい。強制的でない個人の意識に他者の存在を認識させることをゆだねさせるような空間を作ることで、家族の関係をつくると考えた。

入賞(18点・順不同)

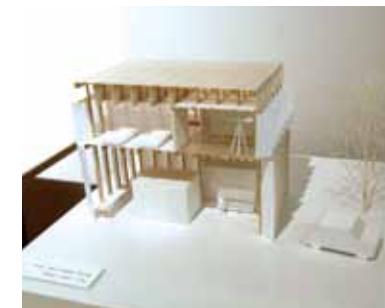
※作品のコンセプトは一部抜粋したものとなります。



「呼吸する家」

東京工業大学大学院
建築学専攻
沼野井 諭

家は生きている。
住宅とは、建築物であるとともに、生きられる空間であり、生きられる時間である。家族とは、親子であり、兄弟であり、そして一人の個人でもある。住宅という動かないものと、家族という変化していくものを結びつけるものが「家」ではないだろうか。だから、家自体が、生命のように動き続ける、呼吸して新陳代謝するような家をつくることが、住まいの原点ではないかと考えた。ここでは、広間を囲むという形式と、窓のバリエーションの組み合わせから、「呼吸する家」のデザインを考える。



「現代日本家屋・扉の家」

日本大学大学院
理工学部 建築学科
瀬戸 基聰

日本人にとっての住まいの原点とは何か?日本には四季があり、季節ごとに環境が変化します。それぞれに風情があり、50年ほど前までは、その気候を楽しむ家が日本の家でした。障子や縁側は、非常に気候に対して順応性を持っています。しかし、建築技術の発達や、家電製品の普及、住宅敷地の狭小化に伴い、それまでの日本家屋は過去のものとなっていました。今回の課題の敷地も典型的な狭小住宅です。そこで、現代的な敷地に対して、日本人の住まいの原点を見直し、現代の日本家屋を提案します。



「カベは裸にされハシラは自由になる」

千葉工業大学
工学研究科 建築都市環境学専攻
小沼 慶典

従来の木造住宅の壁をずらし、動かすことできめ細やかに室内空間を操作する提案です。この「柱・梁」は住み手にカスタマイズされることで真価を發揮します。空間にでてくる梁を手がかりに天板をかけ書斎を作ったり、柱と同じ幅の板をかけ棚を作ったり、フックを取り付けコート掛けのようなモノを作ったりできます。この住宅の住まい手の持ち物で開口が埋まっていきます。この家はちょうど屋根裏を歩くときのような感覚で、探し探り家の使いかたを住み手が考えていくようになり、現代の住宅ではないような使い方の自由さが生まれます。



「谷のある家」

京都造形芸術大学大学院
芸術研究科 芸術表現専攻 環境デザインコース
西川 崇史

1つの部屋に布団を敷き、家族みんなで川の字になって寝ていたところから、家族1人1人に個室を与えられている今まで家族の関係性は多様に変化してきました。最近は友達感覚の親子関係があったり、主夫という新たなカタチがあります。いろんな距離をもって親と子の関わり方が生まれ、その関係は成長すると共に近づいたり離れたり繰り返し変容していきます。そこで、壁による距離の取り方とはちがい、そのような時間、気分、気候などによってつながったり離れたり、いろんな距離を保ながら成長する家族の物語が家の風景となる住宅を提案します。



「8つの部屋の思考する家」

金沢美術工芸大学
デザイン学部 環境デザイン専攻
九尾 怜施

居住者にとってのいわゆる個人部屋は設けずに広間とし、それと対比するように小さな8つの部屋を各階に配した。これが思考する空間であり個人部屋である。しかし個人部屋といつても居住者一人が占有する、あのいわゆる子供部屋とか、お父さんの書斎といったものではなく共有の一人になる、一人になれる個人部屋である。物思いに耽る、考える、悩む、気付く、思慮する、同じ造形的特徴同じ役割を持つ8つの思考する部屋である。



「にじんだものさし」

慶應義塾大学
理工学部
星川 慎之介／井上 岳

このにじんだものさしをつくりだす空間で僕らは住宅を再考する。そこでは、住民家族それぞれの生活が遠いようで近い場所でおこなわれ、また、その住民が生活をおこなう愛撫と外部が混ざり合う。

家族をそれぞれの部屋によって区切ってしまう住宅、または大きく一つにまとめてしまう住宅では見つけることができなかつた輪郭のはやけた、広がりをもった空間が生まれてくるはずである。そこで生まれる空間は住宅の原点を再び作り出していくのではないか。



「土間の庭」

熊本大学大学院
自然科学研究科
瓜生 なつみ

土間はたのしい。いぬがかけまわる。こどもがあそぶ。ごはんをつくる。工作する。なんでもできる。

すまいには、ねる場所さえきちんとあればいい。個室以外をすべて土間にする。土間は道路から1階、さらに2階へとつづく。へやの中 かと思



「隔たりのとなり」

芝浦工業大学
工学部 建築工学科
富永 美保

わたしたちは無意識に、こちらとあちらの境界を意識している。境界を意識することは、機能の役割をつけていくことでもある。機能の境界は隔たりをはさんで、分解する意味で留まっている。1の空間を2に分けることを再考する。ここで、1.5の概念を考える。身体や生活に根付く寸法や隔たりや家族との距離感と、いまあらためて対話してみるべきではないだろうか。



「2つある家」

京都工芸繊維大学大学院
工芸科学研究科 建築学専攻
服部 希美／矢野 隼人／岡田 晃佳

この半世紀人々はより多忙になってきている。具体的に言えば夫婦の共働きや残業、子供の塾通いに代表される習い事が挙げられる。この様な経緯から、人々の一日の活動時間が長くなっている。それに対してイエにいる時間は比例して短くなっている傾向にある。

現状の生活の中で家族にとって一日の始まりであり終わりの場所として存在していく「イエ」としてこの住宅を提案する。ここでの「イエ」とは家族ではなく、共に生活する場所として存在するものとする。



公開二次審査の様子

平成22年 8月21日(土)

新宿パークタワー リビングデザインセンター OZONE



jury



kensuke yoshida
吉田 研介(神奈川)
吉田研介建築設計室



Chie Nabeshima
鍋島 千恵(東京)
TNA



Makoto Takei
武井 誠(東京)
TNA

※当初予定しておりました審査員の一人、豊田正弘氏(豊田編集室)が健康上の都合により審査に参加できなくなりました。
関係者合議の結果、鍋島千恵氏とともに今年度JIA新人賞を受賞された武井誠氏に依頼し、
吉田氏、鍋島氏、武井氏の三人で審査を行いました。

time schedule

エントリー締切 平成22年 4月23日(金) HPのみ URL : <http://www.JACS.cc>

1次応募締切 平成22年 5月14日(金)必着 郵送 JACS 新潟事務局 〒950-0148 新潟県新潟市江南区東早通1-1-40 Tel.025-383-3003 Fax.025-383-3733
データ送信 (pdf、もしくは、jpeg:200dpi以上)し、フォルダにまとめ、zip・LHA圧縮し送信。 送信先 honmo-n@kk-ishikawa.com

1次審査 平成22年 5月22日(土)～23日(日) 会場トステム東京ショールーム(予定) 審査員の協議により選定いたします。【非公開】
1次審査通過者にはメールで通知するとともに、ホームページ上にて発表。1次審査通過は30点を予定しております。
※1次審査通過者は2次審査の準備をお願いいたします。

2次応募締切 平成22年 8月11日(水)必着 郵送 JACS 東京事務局 〒136-0072 東京都江東区大島1-30-3 Tel.03-3685-8484 Fax.03-3685-2514

2次審査 平成22年 8月21日(土) 公開審査 新宿パークタワー リビングデザインセンター OZONE(予定) 審査員の協議により各賞受賞者を決定。【展示公開】
結果は各賞受賞者にメールで通知し、ホームページ上でも発表いたします。

prize

下記賞品を受賞された方に差し上げます。

- 最優秀賞(1点) 賞金 100万円 + ヨーロッパ研修旅行
- 協賛者賞(1点) 賞金 10万円
- 優秀賞(10点) 賞金 5万円
- 入選(18点) 商品券 1万円

(1次審査を通過し、2次審査にエントリーした作品全てを入選とします。)

最優秀作品を始め各入賞作品のうち、
設計者の希望するものについては、
建築・販売を実現するため、JACSが全面的に
バックアップ致します。

注意事項

- ・他者の著作権に触れる画像、文書などの使用は認めません。 ・雑誌、書籍、ホームページからの無断借用も認めません。
- ・応募作品は一切返却いたしません、必要な場合はあらかじめ各自で複写しておいてください。
- ・本コンペの応募作品の著作権は応募者に帰属しますが、入賞作品及び入選作品の発表に関する権利は主催者が保有します。
- ・入賞後の応募者による応募内容の変更は認めません。 ・入選入賞後に、著作権侵害などの疑義が発覚した場合、これを取り消します。
- ・応募作品にて著作権侵害などが発覚した場合、全ての責任は応募者が負うものとなります。
- ・審査の結果については、何人も異議の申し立てをすることは出来ません。

※応募に際して主催者側が取得した個人情報並びに提出物は、当コンペのみに使用されるものであり、その目的の範囲を超えて個人情報を利用する場合、事前に応募者にその目的を通知し、承諾を受けて行うものとする。

事務局

東京 〒136-0072 東京都江東区大島1-30-3 Tel.03-3685-8484 Fax.03-3685-2514

新潟 〒950-0148 新潟県新潟市江南区東早通1-1-40(ステーション内) Tel.025-383-3003 Fax.025-383-3733

